

「裔然入宋求法巡礼行並瑞像造立記」考

山 口 修

さきに清涼寺釈迦如来立像の胎内より、絹製の五臓をはじめ、經典や図像の類、さらに数種の貴重な文書類が発見されたことは、仏教界および史学界に大きな驚きを以て迎えられた。ここに取上げる「裔然入宋求法巡礼行並瑞像造立記」も、そのなかの一つである。^(a) この文書の出現によって、裔然の入宋と、宋国における行迹、および釈迦像の模作に関し、あらたな事実が判明したのであった。

裔然の入宋に関しては、古く西岡虎之助先生に「裔然の入宋について」と題する詳細な研究がある。しかし大正十四年の起草であり、当時として求め得る史料の悉くを駆使して論述されているが、新史料が発見された現在においては、訂正または補足すべき箇所が少なくない。^(b)

さて「裔然入宋求法巡礼行並瑞像造立記」は、紙本墨書、縦17寸、全長150寸の長尺であり、現在は「入瑞像五蔵具記捨物」と共に、一巻に表装されている。以下、この文中では「巡礼行記」もしくは「造立記」と略して示すことにする。この文書は、既刊の図録類に写真を掲げて紹介されているが、あるいは全体の結構を示したために、写真が小さくして判読に堪えず、あるいは巻頭および巻末の一部分しか掲げられていない。

幸いにして塚本善隆先生の論文「宋初の仏教と裔然」のなかには、その全文が掲げられた。原文に読点を施し、読

み易くなって、すこぶる便利であるが、恐らくは校正ミスであろう。まゝ誤字脱字があつて、必ずしも原文を正確に伝えていない憾みがある。⁽⁶⁾

また木宮之彦先生は、齋然の研究を精緻に進められ、その著『入宋僧齋然の研究』において「瑞像造立記」の記述について、もつとも正確な記録史料と評価された。さらに『日宋文化交流史』には、7 桁檀釈迦像の展開と題する章のなかに「巡礼行並造立記」の主要部分を書き下し文にして紹介されている。⁽⁶⁾

ところで私は、清涼寺住職鵜飼光順貌下および檀家総代小松敏男氏のご好意に浴し、文書の全文を複写することを許された。よつて本論の第一節に、全文を写真によつて掲げ、その下段には原文に則して、できる限り忠実な翻字を記載する。

つぎに第二節には、原文の解説を掲げ、下段に簡単な語釈を付した。また些か解説を要する語句、および塚本説あるいは木宮説と相違する箇所については、注を付して後段に私見を述べることにした。

さらに第三節以降において、この齋然文書に則して、その巡礼の行程および造像の由来を、若干の解説を加えつつ論述する。

註

- (1) 釈迦像内納入品が発見された経緯については、佐藤春夫「釈迦堂物語」に詳述されている。また納入品のそれぞれに関しては、国宝図録や重要文化財図録の類に、図版と共に細かく紹介されてきた。清涼寺の住職として調査に立会われた塚本善隆先生も、論文や随筆のなかで、しばしば触れておられる。
- (2) 西岡論文は一九二五年三月廿七日稿と付記され、『歴史地理』第三十五卷第二・三・五号に連載。のち『西岡虎之助著作集』第三卷に収録された。一九八四年、三一書房刊。

この論文については塚本先生は、入宋中の齋然の所は、文獻的に詳しく研究されているが日本史の立場であるので、中国史の

方から見ると、宋国の国情がどうであり、その仏教がどういう状況であったかが明らかにせられていない点に不足を感じるゝと述べておられる（次に挙げる「宋初の仏教と齋然」）。

(3) 塚本論文は『仏教文化研究』第4号（昭29）に発表。のち『塚本善隆著作集』第七巻に収録。

(4) 本宮之彦『入宋僧齋然の研究』は、昭和五十八年六月、嵯鹿島出版会刊。

同『日宋文化交流史』は、昭和六十二年十月、嵯鹿島出版会刊。なお同書には、造立記の全文を申き下し文にして掲げ紹介するゝと述べられているが、実際に掲げられた部分は、入宋してから瑞像の造作を終るまで、および末尾の文であり、前文を欠き、中略もある。

一 影印と翻字

日本國東大寺法濟大師賜紫 齋然

右 齋然 稽首和南

十方諸佛 天龍八部 一切靈祇 仰廻

照燭之恩。俯降 感通之力。切以、齋然爰從託質。

已至成身。捐棄榮華。□離父母。遂投大寺。獲偶

名師。受戒爲僧。日來月往。粗守

如來之禁制。微知持犯之毗尼。內慎外脩。循涯揣

己。欲報劬勞之德。欲酬

水乳之恩。未證苦空。徒鐫肌骨。粵有五臺勝

境。天台名山。雖傳錄標題。奈滄溟隔闊。常懸

思想。志願禮瞻。遽發私心。尋聞 公府。值台州

之甯旅。泊帆檣於日東。因假便舟。來入唐土。

以癸未歲八月一日。離本國。其月十八日到台州。安

若陸行。駭之神速。駐跡於開元寺止。九月九日。巡礼

天台。訪 智者之靈蹤。遊 定光之金地。山奇樹

秀。溪濬泉澄。渡石梁。瞻 四果之真居。登桂嶺。

觀三賢之舊隱

豐干 寒山 拾得

栖心莫及。行役所

牽。十月八日發離天台。十一日到新昌縣。礼

南山澄照大師三生所製百尺弥勒石像。梵容奇

特。靈閣巍峩。以十二日前進。經過杭越。涉瀝數

州。十一月十五日。至泗州普光王寺。礼大聖。十二月

十九日。

到汴京。泊于郵亭。至廿一日。朝覲

應運統天睿文英武大聖至明廣孝皇帝於

崇政殿奏對。蒙

宣。賜紫衣等例物。隨侍僧四人。嘉因定緣。康城

感。寺各授青褐袈裟及錫資等。奉傳

聖旨。於觀音院安下。供須繁盛。不可具陳。泊

甲申歲三月十三日。離京。往五臺山。瞻礼

文殊化境。蒙宣。給一行裹纒。逐處津送。

以四月七日。到岱州五臺山。大花嚴寺。菩薩真容

院。駐泊。尋而礼謁。得不虔誠。其日申時。菩薩

右耳上。化出白光。移時不散。僧俗三百來人。悉

臨。藉。尋而礼謁。得不虔誠。其日申時。菩薩

右耳上。化出白光。移時不散。僧俗三百來人。悉

臨。藉。尋而礼謁。得不虔誠。其日申時。菩薩

右耳上。化出白光。移時不散。僧俗三百來人。悉

臨。藉。尋而礼謁。得不虔誠。其日申時。菩薩

右耳上。化出白光。移時不散。僧俗三百來人。悉

臨。藉。尋而礼謁。得不虔誠。其日申時。菩薩

右耳上。化出白光。移時不散。僧俗三百來人。悉

臨。藉。尋而礼謁。得不虔誠。其日申時。菩薩

右耳上。化出白光。移時不散。僧俗三百來人。悉

臨。藉。尋而礼謁。得不虔誠。其日申時。菩薩

右耳上。化出白光。移時不散。僧俗三百來人。悉

臨。藉。尋而礼謁。得不虔誠。其日申時。菩薩

右耳上。化出白光。移時不散。僧俗三百來人。悉

臨。藉。尋而礼謁。得不虔誠。其日申時。菩薩

右耳上。化出白光。移時不散。僧俗三百來人。悉

臨。藉。尋而礼謁。得不虔誠。其日申時。菩薩

右耳上。化出白光。移時不散。僧俗三百來人。悉

臨。藉。尋而礼謁。得不虔誠。其日申時。菩薩

右耳上。化出白光。移時不散。僧俗三百來人。悉

中祥親至其月當日到金剛窟禮拜而返登東
蓮欣忽聞雷聲震響遂巡視虛降雹
其雹大如雞子至音後晨於東臺見一老約
年八十鬚髮俱白身被紫裳裹三山帽着靴
手携數珠領侍從之遠龍池而行其侍從各
年二十來許一人着青衣裹頭巾手執香爐
不着白衣裹頭巾手執拄杖踟躕而去不知所
在當日遊中臺有五色雲現同日遊西臺有
瑞鳥靈禽現二十三日遊南臺至三更時有
聖燈三炬現勤拳知忝歸命不任豁此日之
神魂副當年之心願盤桓兩月澄息諸緣
其何鄉國須還瓶囊是舉以五月二十九日
發離五臺至六月十四日戴朝 京闕
聖情宣問安慰如初其年十月七日
乾明節弟子二人祈乾祈明各受具戒
至乙酉年三月二日告辭 金殿面封

皆瞻觀。至其月十四日。到金剛窟。禮拜而退。登東
臺。倏忽間。聞雷聲震響。遂巡。飄雪降雹。
其雹大如鷄子。至十五日凌晨。於東臺。見一老人。約
年八十。鬚髮俱白。身被紫裳。裹三山帽。着靴。
手携數珠。領侍從二人。遶龍池而行。其侍從各
年二十來許。一人着青衣。裹頭巾。手執香爐。
一人着白衣。裹頭巾。手執拄杖。踟躕而去。不知所
在。當日遊中臺。有五色雲現。同日遊西臺。有
瑞鳥靈禽現。二十三日。遊南臺。夜至三更時。有
聖燈二炬現。勤拳知忝。歸命不任。豁此日之
神魂。副當年之心願。盤桓兩月。澄息諸緣。
其何鄉國須還。瓶囊是舉。以五月二十九日。
發離五臺。至六月二十四日。戴朝 京闕。
聖情宣問。安慰如初。其年十月七日
乾明節。弟子二人祈乾祈明。各受具戒。
至乙酉年三月二日。告辭 金殿。面對

龍顏蒙 宣賜師子及大藏經四百八

十函五千四十八卷新翻譯經四十一卷

御製迴文偈頌絹帛物等 京中差人

部送仍賜口券驛料及累道州縣抽差人夫傳

送六月二十七日重屆台州於舊處戾止二時

所瞻四事無虧而以 台州知州行左拾遺

鄭公名 元龜奉 佛恭勤稟

宣安堵州民以之眴睞僧侶以之接延台州

管內都僧正監壇選練兼開元都團寺主

賜紫沙門 景堯承

廉使之指南以同道之見待往還如一終始

不移齋然自慶多生叨逢 像運自開往昔

優填國王於忉利天雕刻

釋迦瑞像顯現既當於西土寫邈或到於

中華以日域之遐陬想 梵容而難覩

齋然遂捨衣鉢收買香木召募工匠依樣彫

龍顏。蒙 宣。賜師号及大藏經四百八

十函五千四十八卷 新翻譯經四十一卷

御製迴文偈頌 絹帛 例物等。 京中差人

部送。仍賜口券驛料。及累道州縣。抽差人夫傳

送。六月二十七日。重屆台州。於舊處戾止。二時

所瞻。四事無虧。而以 台州知州 行左拾遺

鄭公名 元龜奉 佛恭勤。稟

宣安堵。州民以之眴睞。僧侶以之接延。台州

管內 都僧正 監壇選練 兼開元都團寺主

賜紫沙門 景堯承

廉使之指南。以同道之見待。往還如一。終始

不移。齋然自慶。多生叨逢 像運。因聞。往昔

優填國王 於忉利天 雕刻

釋迦瑞像。顯現既當於西土。寫邈或到於

中華。以日域之遐陬。想 梵容而難覩。

齋然遂捨衣鉢。收買香木。召募工匠。依樣彫

錢七月二十日起切八月十八日畢手齋所意者
奉酬父母養育師主訓持國王廕休
諸佛救度憑斯巨善先報四恩恭願
唐土帝皇丕業等無窮之化

本國國主崇基延不朽之期

當朝大人此郡太守各承餘慶俱叶長
年齋又於今日發心轉讀大藏經以

皇帝乾明節上扶聖壽仍答

鴻恩然燭焚香開函展卷其次敬三世父
母秉劫親緣如有情無忌念識生生世
世輪迴於六趣三途念念心心速斷絕於十纏
五蓋仍願齋然闡揚正法興顯大乘還家而
海道平寧龍神垂助到國而人心喜悅少長
無災碎摧我慢之幢增添智慧之海年
牙更永行解相應脫或大限有期寂滅
為樂如入禪定勿諸難緣上品上生了空

錢。七月二十日起功。八月十八日畢手。齋然所意者。
奉酬 父母養育。師主訓持。 國王廕休。
諸佛救度。憑斯巨善。先報 四恩。恭願
唐土帝皇丕業等無窮之化。
本國國主崇基延不朽之期。

當朝大人 此郡太守 各承餘慶。俱叶長
年。齋然又於今日。發心 轉讀大藏經。以
皇帝乾明節。上扶 聖壽。仍答

鴻恩。然燭焚香。開函展卷。其次。願三世父
母。曩劫親緣。一切有情。無邊含識。生生世世。
休輪迴於。六趣三途。念念心心。速斷絕於十纏
五善。仍願 齋然 闡揚正法。興顯大乘。還家而
海道平寧。龍神垂助。到國而人心喜悅。少長
無災。碎摧我慢之幢。增添智慧之海。年
牙更永。行解相應。脫或大限有期。寂滅
為樂。如入禪定。勿諸難緣。上品上生。了空

了性恆將妙用普度衆生然後概括
十方該羅三界但有見聞之者俱超解
脫之程既滿願心是所幸矣夫今日瑞像圓就
入五藏次聊書來意以序其由時皇宋
雍熙二年太歲乙酉八月十八日記

僧鑒端爲書

去年六月十八日參洛京龍門禮拜
善無畏三藏真身又同七八月中受
學清昭三藏金剛界胎藏界兩部
三密大教五瓶灌頂已了以此功德平
安渡海歸到本國興隆佛法利益
王民

了性。恆將妙用。普度衆生。然後概括
十方。該羅三界。但有見聞之者。俱超解
脫之程。既滿願心。是所幸矣。今因瑞像圓就
入五藏次。聊書來意。以序其由。時皇宋
雍熙二年 太歲乙酉 八月十八日記。

僧鑒端爲書。

去年六月十八日。參洛京龍門。禮拜
善無畏三藏真身。又同七八月中。受
學清昭三藏金剛界胎藏界兩部
三密大教。五瓶灌頂已了。以此功德。平
安渡海。歸到本國。興隆佛法。利益
王民。

二 釈文と語解

日本國 東大寺 法濟大師 賜紫 齋然

右齋然^{*}は十方諸佛、天龍八部、一切の靈祇に稽首和南し、仰いでは
照燭^{*}の恩を廻^{かへり}み、俯しては感通^{*}の力を降す。切に以^{おも}へらく、齋然^{*}
爰^{こゝ}に託質^{*}に従ひ、已^{すで}に身を成すに至りて、榮華を捐棄^{*}し、□父母に
離れ、遂に大寺に投じ、名師に偶^あふを獲^えて、受戒して僧と爲^なる。日
は來^{きた}り月は往^ゆき、粗^ほぼ如來の禁制を守り、微^{すこ}しく持犯の毗尼^{*}を知る。
内を愼しみ、外を脩^{かづ}め、涯^{かぎり}に循ひて己を拙^{はか}り、劬勞^{くろう}の徳に報いんと
欲し、水乳の恩に酬いんと欲するに、未だ苦空を證^さらず、徒らに肌
骨を鏹^きる。⁽³⁾

粵^{こゝ}に五臺の勝境、天台の名山あり。傳錄標題⁽⁴⁾すと雖も、滄溟の隔て
闊^{ひろ}がるを奈^{いか}んせん。常に思想を懸^{れい}け、礼瞻^{れいせん}を志し願ふ。遽^にかに私
心を發して、公府に尋ね聞^たくに、値^{たま}ま台州の商旅⁽⁵⁾ 帆檣を日東に泊

* 深く拝礼

* 塚本「昭燭」

** 仏法に感じ通ずる

* すてる

* 戒律

* 病苦

* うやまい仰ぐ

す。因りて便舟を假り、來つて唐土に入る。⁽⁶⁾ 癸未の歲^{*}八月一日を以

て本國を離れ、其の月十八日、台州に至る。安きこと陸行の若く、⁽⁷⁾

之が神速に駭く。開元寺に駐跡して止まる。九月九日天台に巡礼

す。智者の靈蹤を訪れ、定光^{*}の金地に遊ぶ。山は奇に樹は秀で、溪^{たに}

は濬^{ふか}く泉は澄む。石梁を渡りて、四果の眞居を瞻^{みあ}げ、桂嶺に登りて、

三賢^{豐干 寒山 拾得}の舊隱^みを觀る。心を栖^{やす}むるに及ぶ莫^なく、行役^{*}に牽かれ、

十月八日、發して天台を離れ、十一日、新昌縣に到る。南山の澄照

大師^{*}三生所製の百尺彌勒石像に礼す。梵容は奇持にして、靈閣は巍

峩^{*}たり。十二日を以て前進し、杭越^{*}を經過し、數州を涉瀝して、十

一月十五日、泗州の普光王寺に至り、大聖^{*}に礼す。十二月十九日、

汴京^{*}に到り、郵亭に泊す。廿一日に至り、應運統天睿文英武大聖至

明廣孝皇帝^{*}に崇聖殿にて朝謁し、奏對す。

宣を蒙り、紫衣并びに例物を賜はる。隨侍の僧四人、嘉因、定緣、

康城、盛算、各々青褐の袈裟及び錫資^{*}等を授かる。聖旨を觀音院に

奉傳し安下す。供須^{*}は繁盛にして、具^{つぶ}さには陳ぶべからず。甲申の

* 永觀元年（九八三）、
宋の太平興國八年

* 天台大師智顗

* 南朝梁の僧、金地に住した

* 行旅の役

* 南山大師道宣

* 高太のさま

* 杭州、越州

* 證聖大師僧伽

* 東京開封府

* 宋の太宗

* 規定によつて支給される金品

* たまもの

* 宿をとる

** 求めにより供紹される物品

* 歲三月十三日に泊および、京を離れて五臺山に往き、文殊の化境を瞻かん礼
せんとす。宣を蒙り、一行に褰かてん纏を給はり、處を逐うて津送すす。四
月七日を以て岱州五臺山大花だいけ嚴ごんじ寺菩薩真容院に到り、駐泊す。尋い
で礼謁す。虔誠けんせざるを得んや。其の日の申時、菩薩の右耳の上に
白光を化出し、時を移すも散ぜず。僧俗三百ばかり來の人、悉く皆な瞻
觀す。其の月の十四日に至り、金剛窟に到る。礼拜して退き、東臺
に登る。倏忽しゆくこつの聞きこ 雷聲の震響するを聞き逡巡す。雪を飄ひろがへし雹
を降らせ、其の雹の大なること雞子の如し。十五日の凌晨に至り、
東臺に一老人を見る。約年八十、鬚も鬢も俱ともに白く、身には紫裳を
被きて、三山帽を褰かぶり、靴を着け、手に數珠を攜へ、侍從二人を領ひきい、
龍池を遶めぐりて行く。其の侍從は各々年二十來許。一人は青衣を着
て頭巾を褰り、手に香爐を執る。一人は白衣を着て頭巾を褰り、手
に拄杖を執る。踟躕ちちゆうして去り 所在を知らず、當日 中臺に遊ぶ。五
色の雲の現はるるあり。同日 西臺に遊ぶ。瑞鳥 靈禽の現はるるあ
り。二十三日、南臺に遊ぶ。夜は三更に至り、時に聖燈二炬の現は

* 雍熙元年（九八四）

* 塚本「泊」

* 身のまわり品

* 旅費を支給する

* 代州

* くやうやくつしむ

* 塚本「身」

* 塚本「來、」

* 塚本「十五日」

* にわかに

* 雞卵

* 塚本「褰」字欠

* 行きつ戻りつ

るるあり。勤^{きんけん}奉^{*}して忝^{かたじけな}きを知るも、歸^{まか}命も任せず。此の日の神魂を豁^{ひら}くは、當年の心願に副^{かな}ひたり。盤桓^{*}すること兩月、諸縁を澄息^{*}せり。其れ何ぞ郷國に還るべけん。瓶囊^{*}を是れ舉げたり。五月二十九日を以て發し、五臺を離る。

六月二十四日に至り、京闕に戴朝す。聖情の宣問、安慰は初めの如し。其の年十月七日の乾明節^{*}に弟子二人祈乾、祈明各々具戒を受く。乙酉^{*}の年三月二日に至り、金殿に告辭し、龍顔に面對す。宣を蒙^{*}り、師號及び大藏經四百八十一函五千四十八卷、新翻譯經四十一卷、御製の廻文偈頌、絹帛、例物等を賜ふ。京中人と缸^{*}とを差^{つか}はして部送^{*}し、仍ほ口券、驛料^{*}を賜はり、道州縣を累^{かさ}ぬるに及びては、人夫を抽^{えら}び差はして傳送せしむ。六月二十七日、重ねて台州に届^{いた}り、舊處に戻^{いた}り止まる。二時の贈^たす所、四時も虧^かくる無し。而も台州の知州行左拾遺鄭公、元龜と名づく、佛を奉じて恭勤、宣を稟^うけて安堵す。州民も之を以て眴^{べんらい}眴^{*}、僧侶も之を以て接延^{*}す。台州管内の都僧正監壇選練兼開元都團寺主賜紫の沙門景堯、廉使^{*}の指南を受け、

* 擎拳と同じく、拱手作礼の意

* 旅行の意

* 振り切る

* 旅中の用具

* 太宗皇帝生誕の日

* 雍熙二年(九八五)

* 法濟大師号

* 人と船と

* 官物を統率して送る

* 食費と宿泊費

* 塚本「虔」

* 塚本「瞻」

* 好意を示す

* 迎えて、もてなす兼

* 按察使

*同道の^{みだ}見を以て待つ。[＊]往還も一の如く、終始^{かは}移らず。奄然自ら多生にして、叨^{みだ}りに像[＊]に逢ふの運を慶ぶ。[＊]因りて聞くに往昔、優填國王は忉利天に於て釋迦の瑞像を雕刻すと。顯現は既に西土に當り、寫邈は中華に到れるあり。日域の遐陬なるを以て、梵容を想へども觀難^{がた}し。奄然遂に衣鉢を捨て、香木を收買し、工匠を召募して、様に依り彫鏤せしむ。七月二十一日に功を起し、八月十八日に畢手す。[＊]奄然の意ふ所は、父母の養育、師主の訓持、國王の廕休、[＊]諸佛の救度[＊]に奉酬し、斯の巨善に憑りて、先づは四恩[＊]に報じ、恭しく唐土帝皇の丕業、無疆の化に等しく、[＊]本國國主の崇基、不朽の期に延び、當朝の大人、此の郡の太守、各々餘慶を承け、俱に長年に叶はんことを願ふ。奄然また今月一日、發心して大藏經を轉讀し、皇帝の乾明節を以て、上は聖壽を扶け、仍^なは鴻恩に答へ、燭を然し、[＊]香を焚き、函を開き卷を展べん。其の次に三世の父母、曩却^{のうじう}の親縁、一切の有情、無邊の含識、生生世世、輪廻を六趣[＊]三途[＊]に休め、[＊]念念心心速かに十纏[＊]五善[＊]を斷絶せんことを。仍^なは願ふらくは、奄然正法を闡^{せん}

* 塚本「同」欠

* 応待

* 釈迦如来瑞像

* 日本国

* 完成

* 庇護

* 濟度

* 父母、師長、國王、三宝

* 燃

* 遙かなる以前

* 有情のもの

* 六道

* 十種の妄惑

* 五戒

揚し、大衆を興顯し、家に還るには海道も平寧に、龍神も助けを垂れんことを。國に到りては人心の喜悅し、少長も災なからんことを。我慢の幢^{*}を碎摧し、智慧の海を増添し、年牙も更に永く、行解も相^{あひ}應じ、大限^{*}を脱^{*}或^{*}すること期あり、寂滅爲樂、禪定に入るが如く、諸々の難縁なけん。上品上生、空^{そと}を了り性を了り、恆に妙用^{*}を將^{もつ}て、普く衆生を度し、然る後十方を苞括し、三界を該羅^{*}せん。但々之を見聞する者あれば、俱に解脫の程を超えん。既に願心を満たす。是れ幸とする所なり。今瑞像の圓就^{*}し五藏を入るるに因り、次で聊か來意を書し、以て其の由を序す。時に皇宋の雍熙二年 太歲乙酉八月十八日に記す。

僧 鑒端 爲めに書す⁰⁰

去年六月十八日、洛京の龍門に參じ、善無畏三藏の真身を禮拜す。又同じき七、八月中、學を清昭^{*}三藏に受け、金剛界胎藏界^{*}の兩部、三密の大教、五瓶^{ごびょう}^{*}の灌頂も已に了れり。此の功德を以て、平安に渡海し、本國に歸到して、佛法を興隆し、王民に利益せん。

*塚本「幢」

*寿命の終り

**||惑

*靈妙なる功德

*ひろくつつむ

*完成

*塚本「照」

**塚本、三字欠

*五瓶の水を以て灌頂

註

- (1) この字は不明である。塚本先生は「禮離」と解されているが、字形から見ても^{しめずへん}「木」または「扌」^{てん}と考えられる。本文の解説に当っては、波多野太郎先生の示教を仰いでいるが、波多野先生は、字形から見て「拋」か、あるいは下句の「遂」に対して副詞ならん、と示唆された。私は「擲」^{はく}かと考えてみたが、傍の形が違ふようである。後考を俟ちたい。
- (2) 「偶」の字については、波多野先生の示教により「遇」の意と解した。偶と遇とは音通である。
- (3) ここまでが前文である。木宮先生の解説は、この先の文より始まる。
- (4) 初め「録に伝へ題に標す」と読んだが、波多野先生より、録も標も動詞であり、伝録および標題は共に副動詞と解すべし、と教えられた。
- (5) 呉越の商人陳仁爽、徐仁満等をさす。その帰船に便乗したことは、すでに論ぜられている。
- (6) この箇所を、木宮先生は「乗じて唐土に入らんとす」と読んでおられるが、原本は「来」であり、しかも宋国において記したものであるから、文字を訂正する必要はない。
- (7) この箇所を、塚本先生は「到台州安着、陸行……」と読んでおられる。しかし原本の字は「着」ではなく「若」と解されるから「到台州」で切る方が自然であろう。木宮先生も、このように訓読されている。
- (8) この「津送」の語を、私は運河の上を、水駅ごとに送り届ける意かと解したが、波多野先生より「津」は宋代の語彙にて旅費を支給する意である、と教えられた。
- (9) この箇所を木宮先生は「不虔誠を得」と読んでおられるが、意味不明。
- (10) 文中「此日之神魂」とあるところを、塚本先生は「此是神魂」と読んでおられる。このところの文は「帰命して豁くに任せず、此の日の神魂は……」と読むこともできるが、「豁此日之神魂」「副当年之心願」というように対句になっているから、やはり所掲のように解した方が良いであろう。木宮先生も、そのように読んでおられる。
- (11) この箇所を、木宮先生は「自ずからなる多生(うまれかわり)に慶び、像に逢うの運を叨(めぐみたま)わる」と読んでおられる。
- (12) 木宮先生の解説は、ここの「畢」字でいったん絶り、以下(中略)とされて末尾の文につなげる。
- (13) この「等」を、初め私は「待つ」と解して「無疆の化を等つ」と読んでいたが、波多野先生から、ここの「等」は「等待の等に非

ずと教えられた。

(14) この原文「休輪廻於」を塚本論文では「休輪廻拾」と写しておられるが、これでは意味が通じない。

(15) 木宮先生は「書を為(つく)る」と読んでおられるが、波多野先生の示教にしたがい「ために書す」と解する。

三 巡礼の行程

齋然の『巡礼行記』は、その前文において、入宋に至るまでの略歴が簡単に述べられている。出生については述べていない。

そもそも齋然の出自については、かつて本朝高僧伝や宋史日本国伝などの伝えによって、俗姓が藤原氏と考えられてきた。ただし東大寺別当次第などには、俗姓が秦氏であり、天慶元年(九三八)一月二十日の出生と伝えられている。こうした異同に終止符を打ったのが、釈迦像の胎内から発現した義蔵と齋然との「結縁手印状」であった。この文書に関しては、塚本善隆先生の「清涼寺釈迦像封蔵の東大寺齋然の手印立誓書」に詳しく紹介されている。⁽¹⁶⁾

結縁手印状の冒頭には、齋然と義蔵との名を掲げた下に、それぞれ出生と受戒の日付を記した。齋然については、次の通りである。

伝灯法師位齋然

天慶元年戊戌正月廿四日誕生俗姓秦氏

天徳三年五月十八日受戒師主寛静

また同じく胎内より発現した「齋然生誕書付」によれば「承平八年正月廿四日のひつしの□のときにむ」まる…

「齋然入宋求法巡礼行並瑞像造立記」考

：』とある。承平八年は五月二十二日に天慶と改元されているから、ここに裔然の生年月日は、天慶元年一月二十四日と確認された。その出身も藤原氏ではなく、秦氏であることも判明した。さらに受戒の日付も、天徳三年（九五九）五月十八日と確認されたのであった。このとき裔然は、二十一歳である。

さて『巡礼行記』は、この間のことを、榮華を去り、父母より離れて、遂に大寺に投じ、名師に遇うをえて、受戒して僧となる。と述べている。ここにいう大寺とは、すなわち東大寺であり、名師とは戒を受けた寛静をさしているであろうか。

この後、裔然は三論を東大寺にて觀理に学び、密教を石山寺の元果に受けたこと、すでに論述されたところである。『巡礼行記』には触れていないが、三十四歳に及んで同門の義藏と意氣投合し、結縁立誓したことを、さきの『結縁手印狀』によって知ることができる。その日付は「天祿三年^{歲次壬申}（九七二）閏二月三日癸巳午時」であった。

すでに裔然は、愛宕山に地を卜して、一処の伽藍を立て、釈迦の遺法を興隆せん、との悲願を抱いていた（結縁手印狀）。その実現のために入宋を企てるに至ったのである。入宋の前における関係の詩文および文書については、旧来の研究に詳しい。⁽⁴⁾

さて慶（滋）保胤が裔然のために草した「入唐時為母修善願文」（本朝文粹）によれば、

裔然は天祿以降、渡海に心あり。本朝は久しく方貢の使を停めて遣はさず。入唐は問^まく商賈の客を待ちて渡るを得。今、其の便に遇ひ、此の志を遂げんと欲す。裔然願はくは先づ五臺山に参じて、文殊の即身に逢はんと欲す。

とあって、五臺山の参詣を天祿年間、すなわち三十代の初めから、心に抱いていたことを示している。さらに入宋のことが定まるや、教王護国寺より長安の青龍寺に宛て、また延暦寺より天台山の国清寺に宛て、それぞれ裔然を紹介

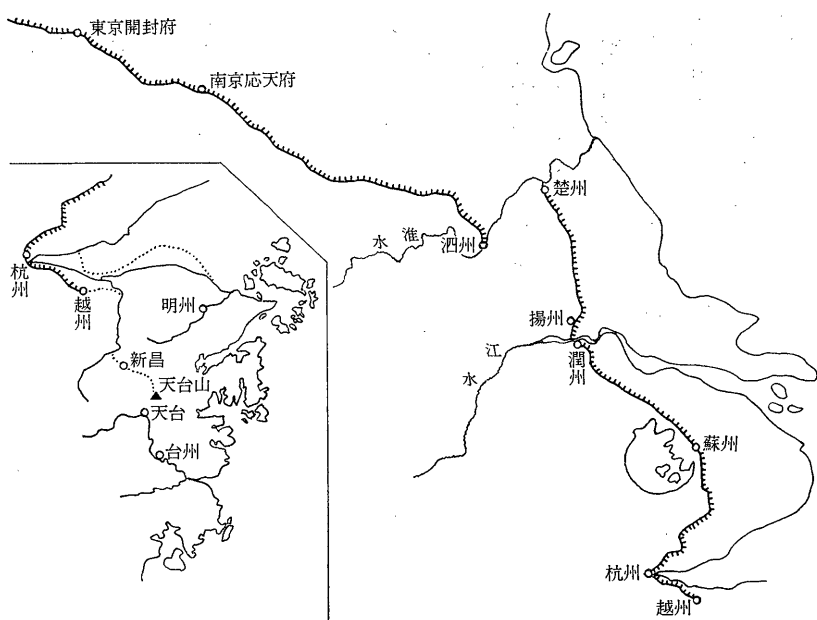
する牒狀を贈られたのであった。すなわち齋然は五臺山および天台山の參詣、また長安への巡錫を志していたのであり、よつて『巡礼行記』にも「五臺の勝境、天台の名山あり」と特記したのであった。

この時期になつても、広大なる滄溟を越えて渡海することは、もとより容易ではない。幸いにして入宋の許可を得ることができ、たまたま来朝していた「台州の商旅」すなわち呉越国の爽仁陳、徐仁滿等の船が帰航するに便乗し、九州より渡海するを得たのである。

出帆および着岸の日付も『巡礼行記』に明記されている。すなわち、わが永觀元年（九八三）「癸未の歳八月一日を以て、本国を離れ、其の月十八日、台州に到つた」のであった。⁽³⁾ その地は五年前（九七八）まで、呉越国の領内であり、五代十国の世に當つて、呉越国の商旅がしばしばわが国との間を往復したことは、よく知られている。呉越商人にとつて、台州または明州（寧波）からの渡海は、もの馴れた航行であり、さればこそ齋然の一行も「安きこと陸行のごとく、その神速に駭いた」次第であつた。かつての遣唐使の渡海における困難から想えば、十八日間で難なく到着できたことは、大きな驚きであつたに違いない。

さて齋然の一行は、ひとまづ台州の開元寺にとどまつて、旅行の許可を待った。およそ海外から訪問した者は、到着地の官衙をへて中央に報告し、その許可を得た上でなければ、内地を行動することはできない。なお開元寺は、唐の玄宗が全国の諸州に設けた大寺であり、入唐僧の円珍も滞留している。

待つこと半月、齋然に対して、早くも上京の詔命が届けられた。よつて「九月九日、天台に巡礼」する。台州から天台山までは、かつて最澄のたどつた道でもあつた。大量の献納品を携えた一行であつたが、詔命による旅行であるから、台州では州吏を差立て、人夫を提供したであらう。いまの始豊溪を溯つて天台の町に達し、そこから天台山に向かう。



第1図

天台山における甯然の足跡は、従来のいずれの記録よりも『巡礼行記』が詳しく伝えている。ここには記していないが、延暦寺よりの牒状を携えて、まづ国清寺に詣ったことは疑いない。おそらくは国清寺の宿坊に駐泊して、天台山の霊地を巡拝したと考えられる。

「智者の霊蹤を訪れ、定光の金地に遊ぶ」。

智者の霊蹤とは、いうまでもなく智者塔院、すなわち智者大師智顗の真身塔院である。智顗は隋の開皇十七年（五九七）、新昌県の石城寺において入滅し、その遺命によって天台山の佛隴の地に移葬された。その地に建てられたのが、真身塔である。唐の元和年間（八〇六）には「台州隋故智者大師修禪道場碑」が建てられ、この碑は塔院の外に現存する。また付近には、天台の祖師と仰がれる章安法師灌頂、荆溪大師湛然の墓もあるから、もちろん甯然は詣でたことであろう。

さて智顗の入山を予言したと伝えられる高僧が、

梁の定光であった。定光は梁武の大同の初め(五三〇年 代の後半)、佛隴山に隠れ、居ること三十年。『祖庭事苑』^五に曰く「天台の佛隴に定光禪師あり、先づ此の峰に至り、弟子に謂ひて曰く、久しからずして当に善知識ありて、徒を領し此に至るべしと」。そこに智顗が入山したのである。陳の太建七年（五七五）であった。さらに曰く「智者顗禪師、年十五の時、佛像に礼するに、恍然として夢の如く、大山の海際に臨むを見る。峰の頂に僧あり。手を招き一伽藍に接し入る。汝ここに居るべし。汝ここに居るべしと」。

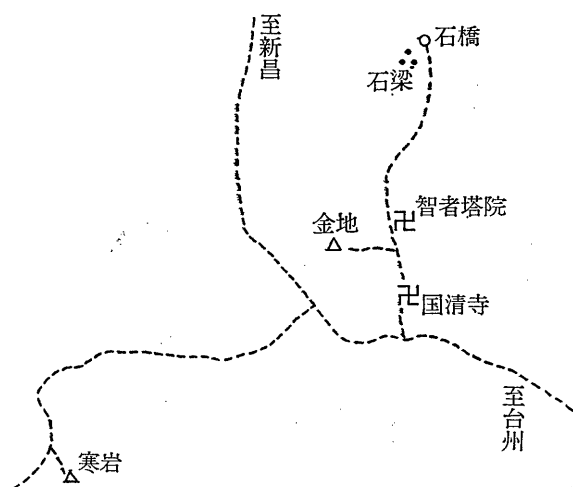
蓋し智顗の入山にまつわる伝承の一つである。佛隴とは天台山の金地嶺の地と考えられ、よって智顗を招いた定光の隠棲のところが伝えられてきた。⁽⁴⁾

斎然の一行は、智者塔院において智顗の真身塔を拝し、さらに金地嶺へと巡拝したのであった。その地は「山は奇に樹は秀いで、溪は濬く泉は澄む」という勝景に恵まれていた。国清寺を築して金地銀地に向かうとき、こうした光景は現代でも味わうことができる。

天台山における巡錫はつづけられた。北へ向かつては「石梁を渡りて、四果の真居を瞻みまげ、桂嶺を登りて、三賢の旧居を覩」たのである。石梁は、いまでも壮大な滝を落下させる石梁飛瀑である。溪谷の上には巨大な石が覆いかぶさり、さながら屋上の梁のごとく、よって石梁と名づけられた。瀑下より石梁を仰げば、巨石はさながら天に接すかのごとく、飛瀑の音は雷鳴にも等しく感じられる。

ところで、ここに「四果の真居」とあるが、その意味を明らかにすることができない。一般に四果といえば、声聞乘における聖果の差別であるが、その真居とあるから、いわゆる四向四果の意ではないであろう。この箇所は遺憾ながら、解釈不能のまま残しておく。大方の示教を請う次第である。⁽⁵⁾

つぎに「三賢」とは、原文にも注記している通り、豊干・寒山・拾得の三僧である。三僧は国清寺にも住し、いま



第2図

も国清寺の境内に豊干橋あるいは寒拾亭があり、唐代の往時を偲ばせている。しかし「三賢の旧隠」といえば、もとより国清寺ではなく、はるか西方に当って、寒岩と呼ばれる台上である。

寒山の遺偈を集めた『寒山子詩集』の序にも、寒山は「天台唐興県の西七十里に隠れ居り、時に国清寺に往還す」とある。

いまでも寒岩の台上には大洞あり、洞の前には坐石あって、三賢が歛宴した所と伝えている。奄然(あはれ)は三賢の遺風を慕い、はるばる寒岩まで足跡を伸ばしたのであった。

さて、以上が『巡礼行記』における天台山巡錫の足跡である。国清寺から北へ西へと巡礼する間、多くの仏蹟を拝したことであろう。奄然としては長く天台山に駐まりたい気持であったが、何せよ上京の途次である。したがって「心を栖むるも及ぶなく」、随行の州吏が促すまま(行役に牽かれ)、十月八日には

天台を発して北上し、十一日には新昌県に達した。

この新昌県には「南山の澄照大師、三生にて製する所の百尺弥勒石像」を安置する南明山瑞象寺があった。澄照大師とは唐初随一の学僧たる道宣(五九六—六六七)であり、終南山に住して南山大師と仰がれ、懿宗の咸通十年(八六九)に澄照の名を贈られている。

新昌県には当時、呉越王錢鏐が重修した南明山瑞象寺があり、寺内に巨大の弥勒石像が安置されていることにより、内外に有名であった。また智者大師智顗が、晋王楊広（煬帝）に招かれて天台山より下る途次、ここで円寂したことでも知られている。寺の由来は古く、晋の永和の初め（三四五）、県光が隱岳寺を創建したと伝える。ついで法蘭が元化寺を開き支遁が石城寺を開いた。梁の天監年間（五一二—五四二）、三寺を合して石城寺と呼んだが、後梁の開平元年（九〇七）に寺院の建物は火災によって焼失し、これを呉越王が再建したのであった。

さて大佛であるが、南山大師道宣（澄照）の所製というのは、高僧に托した伝承である。実際には唐代より前、すなわち斉の永明四年（四八六）から梁の天監十五年（五一六）まで、三代の住僧が三十年の歳月を費して彫造したものであった。よって「三生」の石佛と呼ばれるに至ったのである。現存の大佛は、元代の修復によって跏趺の坐像となっているが、原來は立像であったという。現在の坐像にあっても、佛身は高さ十丈（13・2メートル）という巨大なものである。

齋然は、智者入寂の靈地において、名高き大佛を拝し、山上山下に建ち並ぶ「靈閣の巍峩」たる様に、無量の感懷を覚えたに違いない。よって特筆したわけであろう。

十一月十二日、新昌県を發した齋然は「杭越を経過し、數州を涉瀝して、三日後の十五日、泗州に達した。ここでは「杭越」と記しているが、實際の行程は新昌県から北上し、越州（紹興）をへて杭州に達する。ここから先には大運河が通じているから、舟便に頼ったことであろう。杭州より泗州に至る間は、數州を涉瀝したと述べるのみであるが、途中の揚州において諸寺を巡拝したことは、すでに先学が立証せられたところである。

さて齋然は「泗州の普光王寺に至り、大聖に礼」した。当時の大運河は揚州より北上して楚州、いまの淮安に達し、そこからは淮水を溯って泗州、すなわち盱眙に至った。泗州からは、また大運河が開封まで通じている。泗州は淮河

と大運河との結節点であつた。

泗川の普光王寺は、西城より渡来した僧伽の建立するところ、初めは臨淮寺と称したが、のち唐の中宗より普光王寺の寺号を賜つた。僧伽は祈雨や治病などを示験し、観音の化身とまで称えられて、ひろく天下の信仰をあつめ、泗州のみならず、各地に和尚堂あるいは大師堂が建てられたのである。よつて裔然も泗州に至つて「大聖」に礼したのであり、のちに成尋も国清寺において「泗州和尚の影」像を拜している。⁽⁶⁾

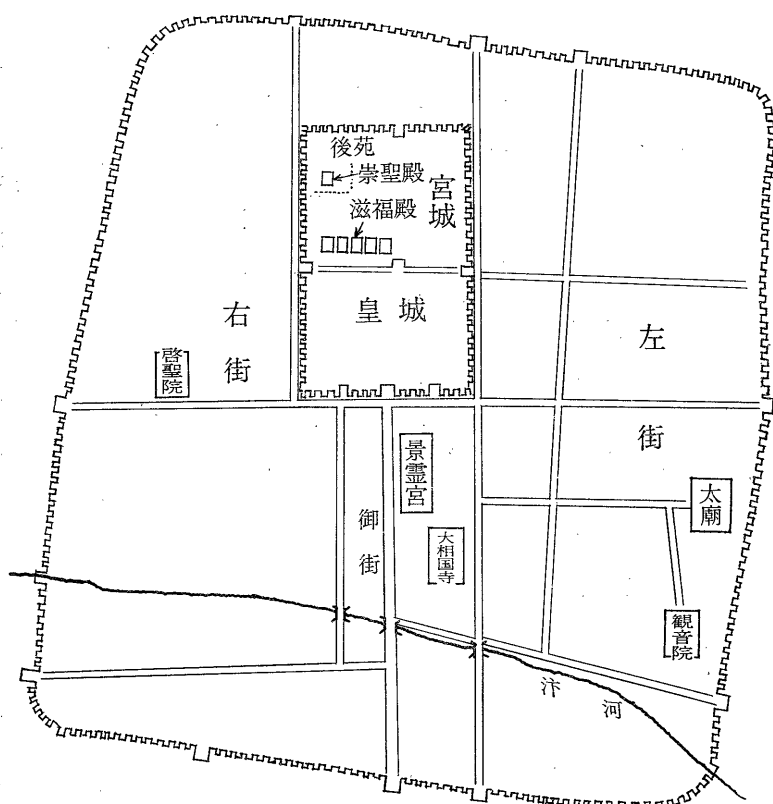
泗州からは大運河によつて西北に進み、十二月十九日には国都の汴京、すなわち東京開封府に到つた。まず「郵亭に泊し」ている。召命を帯びての上京の途であつたから、郵駅を利用することができたに違いない。⁽⁶⁾

到着のことは、直ちに奏上の手続がとられたに違いない。よつて十二月二十一日、太宗皇帝に謁見することを許されたのであつた。ところで太宗の諡号は「神功聖德文武皇帝」である。宋史^四太宗本記によると、太平興国六年（九八一）、すなわち裔然入宋の二年前、十月に「羣臣、三たび奉表して尊号を上り、^{たてまつ}應運統天睿文英武大聖至明広孝皇帝と曰ふ、之を許す」とある。したがつて『巡礼行記』の記述にも、この尊号を用いたのであつた。

太宗皇帝には「崇聖殿にて朝謁し、奏対」した。そして「宣を蒙り、紫衣ならびに例物を賜」わつた。さらに随侍して同行した四人の僧にも、それぞれ「青褐の袈裟および錫資（賜物）等が授」けられたのである。⁽⁶⁾

この崇聖殿は、宋史^{八五}地理志によれば、宮城の西北隅に当る後苑のなかにあつた。太宗は苑内に幸して、遠来の日本僧を召見したのであらう。

この後、裔然の一行は「聖旨」により、宿舍を内城の東南隅に近い「観音院」に与えられた。それより「供須^{なま}」は繁盛にして「つぶさに述べることもできないほどであつた。観音院は『東京夢華録』によれば、皇城の南にある景靈宮の東門から、東へ進んで太廟の前門に達する前、南へ折れたところに位置する。なお『盛算法師記』にも、京の



第3図

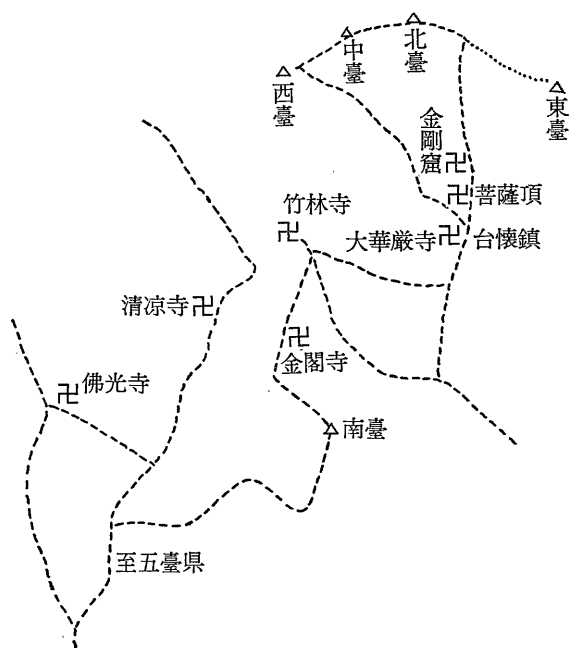
梁苑城左街明聖觀音禪院に住房を与えられた、と記している。

ここで越年し、甲申の歳すなわち雍熙元年（九八四）となった。ところで『巡礼行記』には正月から三月までの行動を記していないが、その間に齋然は勅許を得て京中の寺院を巡拝し、さらに奏聞をへて宮城の滋福殿に入り、梅檀瑞像を拝礼している。

三月十三日におよび、齋然の一行は「京を離れて、五臺山」に向かった。かねてより念願であった「文殊の化境を瞻礼」するためである。この旅行も「宣を蒙り、一行に裹纒（身のまわり品）を給はり、処を逐って津送」すなわち旅費が支給せられた。その行程および五

臺山における巡拝の径路は、あまたの高僧がたどった途であり、よく知られているから、改めて述べるには及ばないであろう。

齋然は四月七日「岱（代）州の五臺山、大花（華）寺の菩薩真容院に到り、駐泊」した。大華嚴寺の後身は、いまの顯通寺である。創建はきわめて古く（寺伝では後漢の明帝代）、初め靈鷲寺、ついで花園寺と称したが、武則天のとき大華嚴寺と改



第4図

められた。齋然が訪れたころの大華嚴寺は、寺域すこぶる広大で、いまの台懷鎮から菩薩頂の一带にまで及び、あまたの塔頭を擁していた。その一つが菩薩真容院であり、いま菩薩頂の上にある真容院が、これに当ると考えられる。

初めて五臺山に登った齋然は、まず真容院の文殊菩薩像に「礼褐」し「虔誠」すなわち身を引き締める想いに浸った。その想いが通じたのか「其の日の申時（午後四時前後）、菩薩の右耳の上に白光」があられ、時が移っても消えなかった。この奇瑞は、そこにあった「僧俗三百ばかりの人」が、ことごとく皆な実見したところであった。¹⁰⁰

四月十四日には「金剛窟に到り、礼拝」し

た。金剛窟は、菩薩頂より北上する途の西方にある。かつて屬賓の僧、佛陀波利が五臺山に至ったところ、文殊菩薩が老人の姿となって現われ、西国より尊勝陀羅尼經を將來することを命じた。よって西行し、經を取って戻り、漢訳に従った後、梵本を携えて入山、ついに金剛窟に入るや、窟門おのづから閉じて再び出ることもなかったという。窟内には等身の文殊菩薩像を安置している。⁰³

ついで「東臺」に登った。そのとき、にわかに雷鳴が轟き「逡巡する」間に、降雪と降雹があり、しかも「其の雹の大なること、雞」卵の如くであった。東臺は『古清涼伝』によれば「高さ三十八里」、今も三千以上の標高であり、「頂上は地平にして周廻三里」であり、また『広清涼伝』には「もと雪峯と名づく」と記している。

ここで喬然は、文殊の化身かとも思われる老人を見たのである。すなわち登頂して一夜を明かし「十五日の凌晨に至り」東臺を歩く一老人を見た。紫の裳をまとい、三山帽をかぶって、靴をはき、手には数珠をたずさえ、供の者二人をしたがえて、龍池をめぐるって行った。⁰⁴

老人の供は、おのおの二十歳ばかり。一人は青衣を着て頭巾をかぶり、手には香炉を持っていた。一人は白衣を着て頭巾をかぶり、手には柱杖をもっていた。老人も従者も、そのあたりを行きつ戻りつしながら、やがて去って行ったが、もとより何処へ去ったのか、知ることはできなかった。

ふしぎな老人を見た後、東臺を降り、その日のうちに「中臺に遊び」さらに「同日、西臺に遊ぶ」と記す。しかし東臺と中臺および西臺との位置から見て、一日のうちに巡拝することが可能であろうか。喬然の文による限り、中間に位置する北臺には登っていない。しかも北臺には、龍池とも思われる深い池があり、中臺と西臺にも、その頂上には、円仁の記述によれば、明らかに「龍池」と呼ばれる池があった。このあたりの喬然の記述には、混乱が認められる。⁰⁵

さて中臺では「五色の雲の現はるるあり」、そして西臺では「瑞鳥、靈禽の現はるるあり」、いずれも奇瑞と感ぜられた。このあとは竹林寺や金閣寺を巡拝したのであろうか。二十三日に至って「南臺に遊」んだ。

その「夜、三更(午後十二時前後)に至り、時に聖灯二炬の現は」れるを実現した。まさしく奇瑞である。恭しく拱手拝礼して忝けなさにむせび、心をこめて叩頭するも、なお足らぬ想いであった。これこそ「神魂」であらうか。五台に詣つて文殊の化境に礼せんとした「心願」にも、かなうべき瑞祥と思われた。その故にこそ、のちに帰国してから太宗に上たまふった表文にも、とくに「巖局(がく)の晴前、聖灯を五臺の上に拝する」を得たと、大きな感激をもって記している。

南臺において「聖灯」を見たという経験は、齋然のみではない。古くから五臺の上に夜半、聖灯の現われたことが伝えられており、円仁もまた南臺の上において聖灯を見ている。ここで「大聖の化現」を求める心は、齋然にあっても同様であった。もとより齋然は古来の伝承を知り、円仁の体験を聞いていたであらう。その「心願」が、ついに叶えられたのであった。

さて五臺山における滞在は二カ月(盤桓兩月)にして、年来のわだかまりも振りきることができた(澄息諸縁)。いまや直ちに郷国に帰るべきではない。旅具(瓶囊)も想えられている。そこで「五月二十九日を以て発し、五臺を離れた」のであった。もちろん、この二カ月の間には、清涼寺に詣って拝礼したことであらう。清涼寺こそは、五臺山における最古の寺院と伝えられ、また五臺山は清涼山とも呼ばれていた。洛北の愛宕山を清涼山に擬し、その山麓に一大寺院を建てて、比叡山に対抗することが、東大寺の僧たる齋然の悲願だったのである。

また齋然は、五臺山を辞した後、長安から洛陽を巡遊している。『巡礼行記』の本文は、五臺山を離れた後は、直ちに開封府到着の記述に移っているが、やはり洛陽における修行について記述すべきである、と考え直したに違いない。よって後段の『瑞像造立記』のあとに、付記の形で録している。付記の内容については、本文の順序にしたがい、

最後に解説を加えることにする。

本節の〈注〉は、次節の〈注〉と通し番号にして、次節の後に掲げる。

四 造像の由来

齋然^{あきら}は五臺山から長安、洛陽を巡礼の後、開封府に戻って「六月二十四日に至り、京闕に戴朝」し、帰京を報告した。そこでも「聖情の宣問および安慰」は、最初の謁見のときと同じく暖いものであった。

さて「其の年十月七日」は、太宗の生誕日に当る「乾明節」であった。皇帝生誕の日は、一代ごとに特有の名称が定められる。太祖は長春節であり、太宗は乾明節であった。その日に、随従した「弟子二人」が具戒を受けたのである。乾明節に因み、法名を「祈乾、祈明」とつけられた。

開封において年を越し「乙酉の年」すなわち雍熙二年（九八五）となる。その「三月二日に至り、金殿に告辭し、龍顏に面對」した。いよいよ帝都を去るに当り、謁見を賜わったのである。そのとき「宣を蒙り、師号および大藏經」などを賜わった。法濟大師の号は、ここで授けられたのである。大藏經四百八十一巻および新翻訳經四十一巻については、従来の研究に詳しい。また「御製の廻文偈頌」は、宋史^{四九}「日本国伝に掲げられた齋然の上表文にも「蓮華廻文の神筆」と表現されている。

さて『造立記』には記されていないが、この滞京中に齋然は、重ねて釈迦瑞像の拝観を許され、さらに模刻の勅許を得ていた。そのことは『盛算法師記』の記述などによって、西岡先生の論述せられたところである。

さきに滋福殿に安置されていた瑞像は、太宗が一百万貫を喜捨して建立した啓聖禅院に移されていた。そこへ奮然は赴き、再び拝観したのであらう。さらに盛算は、瑞像の由来を述べた『瑞像歴記』を得て、これを観音禅院において筆写した。この由来記によつて、のちに『清涼寺縁起』がつくられることになる。

こうして帰途についたが、帰途もまた「京中は人と船とをつかわして部送」すなわち官廨によつて送り、さらに「口券と駅料」すなわち食費と宿泊費を賜わつた。開封および周辺には運河が四通八達しており、よつて運河を船によつて南下することになる。それより「道州界を累ぬるに及び、人夫を抽ひびつかわして伝送」される、という優待であつた。

開封から台州までは三、四日で達する。台州着は「六月二十四日」であり、そこでは「旧処にい戻り止まる」とあるから、また開元寺に泊したのであらうか。朝夕における膳部の接待も、夜に至るまで欠けるところはなかつた。

当時、知州として台州を管轄していたのは、左拾遺の官にありながら刺史を兼任（行）していた鄭元龜である。その人は「佛を奉じて恭勤、宣を稟けて」奮然らを厚く遇した。これによつて州民も好意を示し（賔賒）、僧侶も一行をあたたく迎えた（接廻）。台州管内の僧侶を統括したのは、開元寺主にして紫衣を賜わっている景堯である。按察使（廉使）の指南を受け、親しく「同道」して応待した。いづこに往復するも、常に変るところはなかつた。

さて『造立記』は、これより造像の次第を述べる。奮然としては、瑞像にめぐりあう好運に恵まれたことを、前世からの因縁と覚えたのであらうか。かねてから拝観を熱望していた瑞像は、聞くところによれば、その昔「優う填てん国王が切利天に於て釈迦の瑞像を雕刻」したものである。この伝承はひろく伝えられており、優填国王の念願にこたえ、釈迦如来が切利天より下降して、その姿を毘首羯磨天に彫刻せしめた、それ故に釈尊生身の像として尊崇せられてきたのである。

やがて西域の流沙を越えて、はるばる瑞像は中国まで運ばれた。すなわち釈尊が地上に姿を現わした（顕現）ところは「西土に当り」、その姿を写した瑞像（写邇）は中華の地に到ったのである。しかし日本の地（日域）は遠く離れ（遐陬）ている故に、瑞像の姿（梵容）を拝観することは困難であった。

齋然は、この尊い姿を、ぜひとも日本に将来したいと念じたのである。そこで「齋然は、遂に衣鉢を捨て」すなわち所持の財物を喜捨して「香木を収買し、工匠を召募」するに及んだ。

この工匠は、釈迦像の背面蓋板の裏に「大宋国台州張延皎并弟延襲雕」の刻銘、また反花座表に「唐国台州開元寺」の刻銘があるところから、台州の張兄弟であることが判明した。さらに釈迦像の胎内より発現した『入瑞像五臓具記捨物』の末尾にも、完成の日付を「雍熙二年八月十八日」と記し、つづいて

法濟大師賜紫（自著）齋然 録

造像博士張 延皎

雍熙二年八月初十日造像之次入 佛牙於像面至後時佛背
上出血點不知何瑞象人咸見故此記之時雍熙二年八月十八日

法濟大師賜紫

齋然 録

造像博士張

延皎

勾當法濟僧

齋然

勾当造像僧 居信

と明記されている。造像の責任者が張延皎であると共に、開元寺において造像の事務に当った僧が居延という名であることも、判明した。

この模刻は、まさしく瑞像の「様に依り彫鍍」したものであった。起工は七月二十一日、完成（畢手）は八月十八日である。なお、ここに掲げた文書には、注目すべき一文もあった。

雍熙二年八月初七日、造像の次、佛牙を像面に入れ、已の後時に至り、佛の背に出血一点あり。何なる瑞か知れず、衆人咸見る。故に此に之を記す。

これまた奇瑞といえるであろう。

瑞像の模作は完成した。畢世の念願を果した齋然は、後文において感懷を述べる。まずは父母、師主、国王および諸佛より受けたる「四恩」に報じ、ついで唐土の皇帝、本国の国主が、それぞれ長久の宝寿を保たんこと、そして宋国の人士たちの長命を願った。

さなら齋然は、今月（八月）一日より、発心して大藏経を転読し、まず大宋皇帝の聖寿を祈るほか、帰国に至るまでの安穩を願ったのである。こうして「既に願心を満」たした。その幸せを悦び、いまや瑞像が完成（円就）して、胎内に五臓を入れるに及ぶ。ここに入れた絹製の五臓六腑こそ、釈迦像の修理に際して、胎内より発現し、内外を驚かしたものであった。胎内への納入品については『入瑞像五臓具記捨物注文』において、品目を寄捨の人名を掲げている。

文の末尾には、雍熙二年八月十八日の日付を記し、この文書を僧鑒端が、齋然の「ために書」したものであることが示された。

この裔然の文書は本来、瑞像の胎内に納めるために作られたものである。したがって、いったん胎内に納めてしまえば、遠き将来にわたって人の眼に触れることは、予期されていない。つまり自己以外の他人に対して、みずからの立場を主張し、あるいは弁明する性質のものではなかった。佛の前に、その信仰を吐露する性格のものだったわけである。他人の目に触れることを予期して記した日記の類とは違って、それだけに衷心からの覚悟を伸べ、真実を語っている、と見なすことができるであろう。

さて裔然は、巡礼の足跡と造像の由来を述べ終った後、洛陽に詣って密教の学を修した事実を、述べ忘れたことに気づいたものに違いない。よって付記の形で、そのことを述べた。この付記の文には、洛陽における記事のみが示されているが、恐らくは洛陽から長安にまで足跡を伸ばしたことであろう。出国の前には、教王護国寺から青龍寺に宛てた牒状を得ており（前述）、空海ゆかりの青龍寺に参詣したことは、当然考えられるところである。

付記の文は「去年六月十八日、洛京の龍門に参じ」なことから始まる。去年とは雍熙元年であり、五臺山を発したのが五月二十九日であるから、裔然は五臺山より太原をへて洛陽に、そして龍門に達したのであった。龍門では「善無畏三蔵の真身を礼拝」した。

このことは『鵝珠抄下』の「善無畏事」条に引用された『裔然在唐記』の記事と、相応ずる。日記のなかでも、裔然は次のように述べていた。⁸⁰

龍門山また原伊水の北に向ふ流れ。○伊水の東西に多く三蔵大師等の墳墓あり。西山に広化寺あり、是れ真言の祖師善無畏三蔵の建立なり。○次下に二重八角の経蔵あり、一切経を納む。是れ西川王の書写して将来し、此の蔵に安置せるなり。三蔵の在日、此の蔵を以て灌頂殿と為す。没後、経蔵を為すなり。蔵の傍らに五重塔あり。塔の下に三蔵の身を安んず。全身散ぜず。○跏坐、合掌す。⁸¹

龍門よりは「七、八月」に、洛陽（もしくは長安）において密教の奥義を受けた。すなわち清昭三蔵により「金剛界、胎藏界の両部」および身・語・意「三密の外教」を学び、さらに「五瓶の灌頂」も受けおわたたのである。

かくの如く純密の修行をも積んだ「功德を以て」齋然は「平安に渡海し、本国に帰到して佛法を興隆し、王民に利益せん」と、重ねて心に誓ったのであった。

註

(1) 塚本論文は「仏教文化研究」四（昭和29）に発表。のち『塚本善隆著作集』（第七巻）に収録。

(2) 前掲、西岡先生の論文には、慶滋保胤の筆になる「為母修善願文」や齋然に餞する賦をはじめ、教王護国寺および延暦寺より贈られた牒状など、ことごとく挙げて論証を試みておられる。

(3) 渡海の日付については、齋然に随行した盛算の『盛算法師記』に「本朝の永観元年八月一日」とあり、また『清涼寺縁起』にも「永観元年癸未八月一日にともづなをとく」とあって、従来からは誤りなきものと考えられてきた。しかし別に天元五年（九八二）、あるいは永観二年などと記す文献もあるところから、その記述の信憑性が論じられてきたが、これも『巡礼行記』によって、はっきり確かめられたわけである。

(4) この地には、のちに成尋も訪れ、『參天台五臺山記』に行程を詳しく録している。齋然もまた同様の行程をたどったことであろう。参考のために、成尋の記述を掲げておく。

「(国清) 寺の東、嶮峻の坂を登り、十三里を過ぎて、金地定惠真身塔院に参ず。内額に勅真覺之院と名づく。院は是れ天台大師真身塔なり。塔内に龕あり。龕内に坐すは大師の真身。焼香礼拝し、涙さらに禁じ難し。昔ただ名を聞き、今親しく奉拝す。中心の悦び何事か之に如かん。……智者大師留身の墳を出で、驕に乗りて漸く大慈寺に向ふ。金地銀地は南北に交頭し、松を殖え竹を生ず。東西は娑婆、路は其の中に由る。二里を過ぎ大慈寺に至る。陳朝の大建十年戊戌二月六日、宣帝は智者大師の為に寺を置き、修禪寺と号す。……続いで造り、改めて禪林寺となす。会昌の廢後に重建す。殿堂屋宇すべて二百十九間。大宋の三朝、大中祥符元年（一〇七〇）戊申七月初三日辛酉、勅して禪林寺を改め、大慈寺と名づく。斯れ則ち智者伝法の地。また銀地道場と号す。智大師は随の大建七年を以て、……九月、此の山に至る。乃ち定光禪師に見え、夜は金地

に宿る。禪師曰く、北峰の銀地、汝まさに此に住すべしと。即ち初めて入場す。今の太慈寺は是なり。」

齋然が銀地に至ったときの寺名は、禪林寺であったと認められる。

- (5) 塚本先生は前掲論文のなかで、齋然は「天台山では智者大師四果の真居をみ」たと述べられているが、その意味は不明である。智顗の『四集』とは、またその『真居』とは何であるか、私には解することができない。

そもそも石梁の地は、古くから五百羅漢心身のところ、と伝えられてきた。ここには上方広寺、中方広寺が建てられ、五百羅漢が安置されている。「四果の真居」とは、五百羅漢にまつわることであろうか。これまた示教を俟ちたい。

- (6) この道は後に成尋も往復している。すなわち成尋は、往路に新昌県より関嶺を越えて天台県に入り、景福院に詣でて、半丈六の釈迦像を拝した。齋然も景福院に寄ったことと思われるか、記述するところはない。なお成尋は天台山に滞在すること三カ月、帰路は齋然と同じく、天台県から新昌県へと北上したのであった。

- (7) 揚州における齋然の行動は、西岡先生が前掲論文において『盛算法師記』や、諸文献に引用されている齋然在宋中の日記四巻の逸文によって、くわしく跡づけておられる。

すなわち齋然は、揚州では開元寺に到って、天竺伝来の釈迦梅檀像を拝せんとし、また鑑真ゆかりの龍興寺に詣り、長さ一寸の仏牙を拝した。このことが日記の逸文たる『齋然入唐記』や『齋然巡礼記』によって知られたわけである。

但し西岡先生は、当然のことながら釈迦像の胎内文書に接しなかったため、論文の中において「齋然の天台山に詣でたのは、何時であったかということは、不明である」とし、また「十月八日に淮南揚州開元寺に詣り」と述べられている。こうした日付に関しても、いまや『巡礼行記』によって、天台山の滞在は九月九日より十月八日の間であり、揚州に寄った日付も十一月十六・七日から十八日の間であったことが明らかとなったのである。

- (8) 成尋は、わが延久四年(七二〇)四月二日、まず明州の東茹山に入港すると、船頭たちは上陸して泗州大師堂に参拝したという。山頂に僧伽像を安置する堂があつて、「往還の船人、常に参拝する処なり」と教えられた。それほど信仰があつめられていたのであり、天台山においても僧伽像のまつられていたことが知られる。齋然も国清寺において僧伽像を拝し、泗州の本山で「大聖」に礼したことに、ふかく感銘して特筆したものであろう。

- (9) 中国では古くから、いわゆる駅伝の制が完備していた。公用の文書を伝達する使者はもとより、官符を与えられた旅行者も、その施設を利用することができた。この『巡礼行記』の後段にも、このような便宜を与えられたことが記されている。

なお宋代に及んで、公文書を騎馬にて通送するを「駅」と呼び、人間の脚力にまかせて通送するを「郵」と称した。その宿泊施設が「郵亭」である。わが江戸時代に飛脚便が発達すると、これを「郵便」と呼ぶことがあった。明治になって開設された文書の伝達便も、当初は専ら脚夫が、疲走して通送したから、その字義どおりに「郵便」と名づけられたわけである。

- (10) このときの状況は宋史^{一四九} 日本国伝に詳しい。すなわち「雍熙元年（九八四）、日本国の僧齋然、其の徒五、六人と海に浮んで至り、銅器十余事ならびに本国職員令、王年代記、各一卷を獻す。齋然は緑を衣る。自ら云ふ、姓は藤原氏、父は真連たり。……」と記し、齋然との問答を録した後、齋然が獻上した年代記等によつて、わが歴代天皇の世系および日本の地理について、詳しく紹介している。なお宋史の文中に、齋然の姓を藤原氏と記しているが、誤りであることは、すでに述べたところである。また西岡先生は、このとき齋然が「紫衣を賜いて法濟大師の号を加へられた」と述べておられるが、大師号の賜与は翌年、帰朝に際してであつた。

- (11) 瑞像に關しては古くから伝えられるところ多いので、とくに述べ立てる必要はないであらう。勅命によつて齋然を案内したのは、客省承旨行首の官にあつた張万進であり、このことを『清涼寺緣起』にも次のように記している。

正月中に宣旨をかうぶり、京の大川の寺院を順礼してかへりまいり、奉聞していはく、彼瑞像拜しみ奉らんこと夙望なり、と申す処に、張行首と云人に仰せ、滋福殿に参内して、瑞像拜見の本望を達す。齋然法橋、盛算法師一行等なり。

この瑞像は、天竺より渡来して後、涼州、長安、揚州、金陵（南京）を軽々とし、宋代に及んで太祖のとき、開封の左街にあつた開宝寺の永安院に移され、さらに太宗が宮城内の滋福殿に安置したのであつた。滋福殿は、後の皇儀殿である（^{一〇三三}改称）。

- (12) 真容院および文殊菩薩像については、古く『広清涼伝』に記述あり。円仁も『入唐求法巡礼行記』（以下、円仁の記と略す）において、「此の像時々光を放ち、頻りに靈瑞を現はす」と記している。

- (13) 金剛窟の文殊師利にまつわる所伝は『古清涼伝』にあらわれ、さらに『広清涼伝』は佛陀波利の入窟を記す。こうした所伝のあらましを、円仁は金剛窟に参詣した折に記し、また成尋も「金剛窟文殊菩薩宅に礼す。……窟上に等身の文殊像あり、眷属圍繞す」と記している。

- (14) このところ齋然の記述には、些か疑問がある。すなわち『古清涼伝』には、東臺の「頂上に水なし、惟だ乱石あり」と記す。龍池と呼ばれる水のあるのは、むしろ北臺と中臺および西臺であつた。北臺について円仁の記には、「臺頂の南頭に龍堂あり、堂内に池あり、其の水は深く黒く、満堂は澄みたる潭」をなす、とある。また中臺の臺頂には「中心に玉花池あり、四方各々四

丈ばかり、名づけて龍池となす。……池水は清澄、深さ三尺ばかり」とある。さらに西臺も「臺頂の中心に亦た龍池あり、四方各々五丈ばかりなるべし」と記している。

次に述べられる日程から見ても、東臺において老人を見たという記述には、疑問を抱かざるを得ない。

- (15) 重ねて円仁の記を引用するが、五臺の位置関係については、次のように述べている。すなわち「四臺を望見すれば、西臺と北臺とは、中臺を去ることや稍々近し。……三臺は地勢も近く相連なる。東臺、南臺は中臺を去ること、並びに五十里ばかり。したがって北臺・中臺と西臺ならば一、二日のうちに周遊することも可能であろう。しかし早晩に東臺を発して、その日のうちに中臺および西臺に登ることは、どうしても無理である。

- (16) 円仁の記するところは、次の通りである。

(開成五年七月二日) 今、南臺の上にあり、頭陀等数十人と共に、同じく大望の化現を求む。夜に及ぶも見えず。遂に院に帰って宿る。初夜(午後八時前後) 臺の東に一谷を隔て、嶺上の空中に聖灯一盞を見る。衆人、同じく見て礼拝す。其の灯の光は、初め大きき鉢ばかりの如く、後に漸く大きき小屋の如し。大衆は至心にて高声に大聖の号を唱ふ。更に一盞の灯あり、谷に近く現はる。また初めは笠の如く、向後に漸く大なり。両灯は相去ること、遠望すれば十丈ばかり。焰(灯?) 光は焰然として、半夜に至るに直り、没して現はれず。

- (17) 印本大藏經および新翻訳經については、改めて述べるまでもないであろう。御製の廻文偈頌とは「御製蓮華心輪廻文偈頌」全二十五卷であり、太平興國八年(九三八)撰。僧録司に命じて注解を施させている。

- (18) ただし西岡先生は『造立記』を見ることができなかったため、瑞像は「雕佛博士張榮を招雇して、彼の院(啓聖禪院)に参じて移造せしめた」と述べておられる。これは『盛算法師記』の類しか参照できなかったための誤りであり、瑞像の模刻が台州で行われたことは『造立記』後段の記述によって明らかである。因みに「清涼寺緣起」も、造像の由来を次のように説いている。

時にきて齋然あやにくに奏して申さく、我身いやしといへども、不思議の機縁をもて瑞像を拝見し奉る事、生々世々の本懐なり。伏て願はくは、此靈像をうつし刻て日本国に渡し奉り、上一人より下万民に善縁を結ばしめむと、あながちに歎き申奉る処に、皇帝いよく齋然が懇懇のこころざしを感じおぼしめして、便(へん)尊像を内裏の西花(華)門の外に出し奉り、故宮を以て精舎となし、あらたに啓聖禪院と号し、銅錢一百緡を捨て、佛師の名匠張榮をめして、彼精舎に於てうつし造らしむ。不日に事なりて、福智円満し、妙相端嚴なる事、毗須羯磨がつくりし古佛にすこしもたがふ所なし。

(19) 長安に巡礼のことは、この齋然文書だけでなく、従来から知られていた『盛算法師記』や、齋然日記の逸文にも、まったく触れられていない。しかし西岡先生も次のように述べておられる。

……洛陽より更に西行すれば、京兆府長安県に達する。長安には有名な青龍寺が在って、齋然は東寺より此の寺宛の紹介状を携えているのであるから、当然長安に入り当寺を訪れたことであつたろうが、今それを証すべき確実な記録が見当らぬ。

(20) 『真言宗全書』第三十六卷所収。